【研究論文】

「教職実践演習(幼稚園)」における意識調査の分析
－発表形式の違いによる保育実践に関する学生の意識の推移－

平尾憲嗣*　滝沢ほだか*　山田悠莉*　米窪洋介*　鳥居恵治*　加藤早苗*
横田典子*　野田美樹*　大岩みちの**　赤羽根有里子**　小野隆**

要　旨

「教職実践演習(幼稚園)」は、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられ、本学では「保育者に必要な資質能力を再確認し、これまでの学修全体をまとめていく演習を通じて、保育現場における実践を伴うことができる力量の形成を目指す」という目的を掲げ開講している。平成25年度は、文部科学省が「教職実践演習(幼稚園)」に求める「教員として求められる4つの事項」について、幼児教育祭における発表に向けた異なる発表形式での学生の意識が、授業進度に関連してどのように変容するかについて着目し、調査分析を行った。その結果、発表形式による、学生の意識の変容に差が認められるものの、授業全体からは学生の意識の向上が認められた。

Abstract

"Practical teaching drill (kindergartens)" in the final stage of the past learning aims to reconfirm what qualifications and abilities should be acquired by childcare workers, and develop them through practical drill. The ministerial investigation was held and analyzed in 2013 to see how students' consciousness changed at their presentation of progress in a campus event. It revealed various changes in their consciousness according to the presentation style, but positive enhancement in their consciousness throughout the class.

キーワード：教職実践演習　発表形式別　意識　学び　幼児教育祭

Ⅰ．はじめに

本学で実施されている「教職実践演習（幼稚園）」（以下、本授業）は、「保育者に必要な資質能力を再確認し、これまでの学修全体をまとめていく演習を通じて、保育現場における実践を伴うことができる力量の形成を目指す」という目的の元、実施されている。そこでは、保育者に必要な知識や技能、さまざまな場面に応じた対応力、子どもとのコミュニケーションの取り方などについて、必要に応じて不足している知識や技能の定着を図ることも同時に目指している。本学では毎年2月に開催される幼児教育祭と関連付け、保育現場の生活発表会を意識したロールプレイによる成果発表を行っており、学生が保育実践の場を強く意識することにつながっている。我々授業担当者は、本授業において学生自身が様々な事柄についてどのような意識をもって学びを得ることができたかを把握するため、文部科学省によって示された本授業に求める「ねらい」沿って、授業進度における受講学生の意識の変化について着目した。

本研究では、発表形式別に行ったアンケート調査から学生の意識の変化を分析し、本授業における学生の学びのプロセスを明らかにすることを目的とする。また、異なる発表形式に向かうクラス活動のプロセスについての長所、短所を明らかにし、今後の指導について検討を行う。

Ⅱ．調査方法

1. 対象

平成25年度本学幼児教育学科第一部2年生（242名）、第三部3年生（87名）の合計329名を対象とする。各発表形式別の学生の人数は以下の通りである。

・ホール劇（82名）
・ホワイエ劇（83名）
・教室劇（44名）
・巨大迷路・アトラクション（120名）

＊ 岡崎女子短期大学　　＊＊ 岡崎女子大学

2. 内容

本学における本授業は、卒業学年の後期に開講される（授業計画は表1を参照）。本授業の全17回において、前半は、保育・教育課程、長期・短期指導計画など、幼稚園での保育における基礎的な内容について、教科目での学びと実習での実践を振り返りながら学びの確認を行う。また、付属幼稚園での2回目となる見学実習は、記録の書き方、幼児理解の総仕上げを目指すとともに、付属幼稚園の学級経営案を参考にさせてもらいながら、学級経営について関心を寄せ、イメージを描くという内容で組まれている。後半は、保育現場における生活発表会を想定した活動を幼児教育祭に関連づけ、４つの異なる活動場所に分かれ、ロールプレイを通して積極的に表現活動を行い、カウンセリングマインドについても学ぶこととなる（写真1～9を参照）。本研究では、文部科学省が本授業科目の「教員として求められる4つの事項」として定める4つの項目について、その到達目標を定めた、到達の確認指標例の内容を含めたアンケートを毎授業後に実施し、5段階の自己評価で授業における学生の意識調査を行った。文部科学省が定める教員に求められる4つの事項は以下の通りである。

1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
2. 社会性や対人関係能力に関する事項
3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項

各発表形式の決定後（授業7回目）から総括（授業16回目）までに実施した10回分（活動内容は表2を参照）のアンケートの回答に着目し、４つの異なる発表形式での学生の自己評価について平均値を求め、学生の意識の変化に焦点を当て分析する。

着目した質問項目は以下の8つである。

＜使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項＞

①試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わう

②興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組む

＜社会性や対人関係能力に関する事項＞

③挨拶・言葉遣い・人への接し方・服装等、社会人（保育者）としての基本的な事項を身に付けようとする

④集団において他者と連携し、協力して課題に取り組む

＜幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項＞

⑤他者の声を真摯に受け止め、公正な姿勢、受容的な態度で接する

⑥「ねらい」に応じた教材（台本・制作物等）を開発、作成し、環境を構成する

＜教科・保育内容等の指導力に関する事項＞

⑦発問や話し方等、保育を行ううえでの基本的な表現の技術を身に付けようとする

⑧子どもの反応を活かし、皆を巻き込みながら保育を展開する

表1　授業計画

授業回数	内容
1	全体会/保育・教育課程　長期指導計画　短期指導計画について 3・4・5歳児に対応・配分/履修カルテ記入
2	長期指導計画（年間計画）シュミレーション/生活発表会に向けた 3学期3ヶ月の月週案
3	付属三園に分かれて見学・観察し配属クラスの学級経営案に基づいてクラス経営について学ぶ
4	全大会にて付属三園園長の講話/各教室に分かれ見学・観察した園の園長先生の講話を聞く
5	全体会にて幼児教育祭当日の日程・子どもとの関わりやロールプレイにおける配慮等の説明/各クラスの出し物について話し合う/具体的な計画案作成
6	各クラス計画案提出/コンペ（計画案説明）を行う
7	クラスの内容に従って計画全体像の提出/クラスごとに重点化されたものをロールプレイによって表現しながらカウンセリングマインドについて学ぶ
8～13	クラスごとに重点化されたものをロールプレイによって表現しながらカウンセリングマインドについて学ぶ
14	幼児教育祭一日目
15	幼児教育祭二日目
16	総括
17	履修カルテ記入

表2　表1での7回目から15回目の授業における、各発表形式での活動内容

授業回数（授業日）	ホール劇	ホワイエ劇	教室劇	巨大迷路・アトラクション
7（12/13）	発表場所における活動内容について検討			
8（12/20）	台本や構成の検討/セリフ読み合わせ等	台本や構成の検討	台本や構成の検討	会場構成や設定の検討
9（1/10）	中間発表 台本や構成の検討/舞台構成の検討	台本や構成の検討/舞台構成の検討/セリフ読み合わせ等	台本や構成の検討/舞台構成の検討/セリフ読み合わせ等	会場構成や空間設定について具体的な検討
10（1/17）	練習・製作①	練習・製作①	練習・製作①	製作①
11（1/24）	練習・製作②	練習・製作②	練習・製作②	製作②
12（1/31）	練習・製作③	練習・製作③	練習・製作③	製作③
13（2/7）	リハーサル	リハーサル	リハーサル	ダンボール迷路・アトラクション設置
14（2/8）	幼児教育祭一日目/反省会/翌日の準備			
15（2/9）	幼児教育祭二日目/反省会/翌日の準備			
16（2/17）	総括			

表3　各発表形式における発表内容

発表形式	発表内容(活動学生数)
ファンタジーワールド（ホール劇）	海の仲間と大切なぼうし（41名）
	どんなお弁当がすき？～ぱっくん王国の運動会～（41名）
シアターランド（ホワイエ劇）	とびだせクレヨン～みんな大切な仲間だよ～(42名)
	ぼくらのオニをやっつけろ！（41名）
スマイルステージ（教室劇）	行くぞ！ブレーメンメン ブレーメン！（44名）
子どもランド（巨大迷路・アトラクション）	大冒険～絵本の世界へ飛び込もう！～（120名）

写真4　ホワイエ劇（リハーサル）

写真1　ホール劇（練習）

写真5　教室劇（練習）

写真2　ホール劇（リハーサル）

写真6　教室劇（幼児教育祭）

写真3　ホワイエ劇（練習）

写真7　巨大迷路・アトラクション（製作）

写真8　巨大迷路・アトラクション①（幼児教育祭）

写真9　巨大迷路・アトラクション②（幼児教育祭）

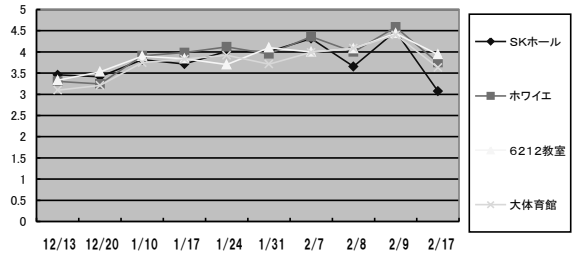
Ⅲ．結果と考察

教員に求められる事項ごとに行った学生の意識の変化について、その調査結果を以下に示す。

1.＜使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項＞

図表１においては、全ての発表形式において、1月10日の活動から値が上昇していた。このことから、1月10日の授業において、発表に向けた具体的な舞台構成や空間構成等の検討を主とした活動に取り組む内容が、学生の意識を高めたと推測できる。劇は、台本や構成の検討のみならず、舞台構成やセリフの読み合わせ等の活動、巨大迷路・アトラクションでは会場構成、空間設定についての検討を行う活動であった。それらの活動が、試行錯誤を通して自分の力で行うことへの意識を高めることに繋がったことが示唆される。教室劇では、1月24日の活動において、その他の活動場所よりも低い値であった。学生の記録から、練習における段取りが悪かったとの記述があったことから、値の低下はその影響であると推測される。また、巨大迷路・アトラクションでの1月31日の活動において、その他の発表形式よりもやや低い値であった。劇の練習では、毎回の授業進度において、幼児教育祭での発表場所と同じ場所での練習が可能であるため、子どもとの関わりをイメージしながら活動し易い。しかし、巨大迷路・アトラクションでは、製作物の設置を体育館で行うため、実際の場所に置くことができる時期が、後期の授業スケジュールの直後に限られている。そのため全ての製作物を実際に配置して空間を把握することが困難であることが、値が低かった理由の１つであると考えられる。

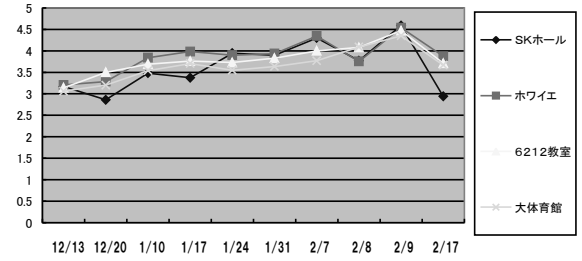
図表１　①「試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わう」での各発表形式における推移



	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	3.5	3.4	3.8	3.7	4.0	4.0	4.3	3.7	4.5	3.1
ホワイエ劇	3.3	3.2	3.9	4.0	4.1	4.0	4.4	4.0	4.6	3.8
教室劇	3.3	3.5	3.9	3.8	3.7	4.1	4.0	4.1	4.4	3.9
巨大迷路・アトラクション	3.1	3.2	3.7	3.8	3.9	3.7	4.0	4.1	4.4	3.6

図表2においては、ホール劇の12月20日における活動が低い値であった。台本や構成の検討、およびセリフ読み合わせにおいては、全身を使う活動ではなかったためと推測される。また、1月17日での活動においても、ホール劇の値が低下していた。その理由として、1月10日の中間発表を経て、劇での脚本の見直し、内容の作り直し、また役割の担当も変更し直すといった経緯があったことから、その影響によると考えられる。一方で、2月7日のリハーサル、2月9日の幼児教育祭二日目において、付属幼稚園の子どもたちや来場者と、劇を通して直接関わることで、ホール劇とホワイエ劇については特に意識が高まったことがその値から明らかとなった。

図表2　②「興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組む」での各発表形式における推移

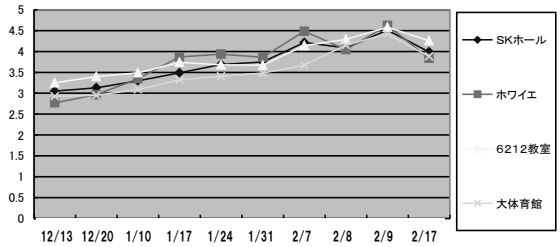


	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	3.2	2.9	3.5	3.4	3.9	3.9	4.3	3.8	4.6	2.9
ホワイエ劇	3.2	3.3	3.8	4.0	3.9	3.9	4.3	3.8	4.5	3.9
教室劇	3.1	3.5	3.7	3.8	3.7	3.8	4.0	4.1	4.5	3.7
巨大迷路・アトラクション	3.1	3.2	3.5	3.7	3.6	3.6	3.8	4.1	4.4	3.7

2.＜社会性や対人関係能力に関する事項＞

図表3においては、全体的に全ての発表形式において、2月9日の幼児教育祭までの波形が右肩上がりとなっている。その一方で2月7日のリハーサルにおいて、巨大迷路・アトラクションでは低い値であった。付属幼稚園の子どもたちは劇型の発表形式への参加のみであったことから、巨大迷路・アトラクションでの活動では、対人関係についての意識がそれほど高まらなかったことが推測される。また、製作等の準備における対人関係は、劇での活動における、人と人が芝居をするような密接な対人関係とは性格が大きく異なると考えられるため、全体的に値が低かったことが推測される。しかし、2月7日から2月9日の値の推移に着目すると、特に巨大迷路・アトラクションでの発表形式において、高い値に推移した幅が最も大きくなっている。これは、実際に子ども達と関わる活動を通して、挨拶・言葉遣い・人への接し方・服装等、社会人（保育者）としての基本的な事項を身に付けようとする意識が高まり、幼児教育祭二日目での子どもや仲間との関わりを持った活動が、学生の中でその意識を高める重要な役割を果たしていたことが推測される。また、その他の発表形式においても、同様に高い値を示していた。

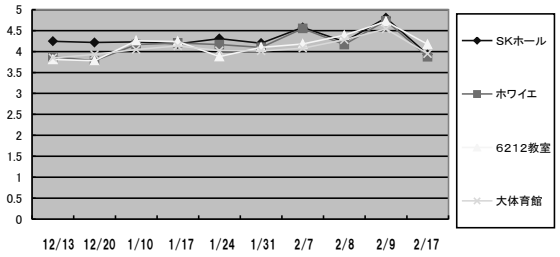
図表3　③「挨拶・言葉遣い・人への接し方・服装等、社会人（保育者）としての基本的な事項を身に付けようとする」での各発表形式における推移



	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	3.1	3.1	3.3	3.5	3.7	3.8	4.2	4.1	4.5	4.0
ホワイエ劇	2.8	3.0	3.4	3.9	3.9	3.9	4.5	4.0	4.6	3.8
教室劇	3.3	3.4	3.5	3.7	3.7	3.7	4.1	4.3	4.6	4.3
巨大迷路・アトラクション	2.9	3.0	3.1	3.3	3.4	3.5	3.7	4.2	4.4	3.9

図表4においては、17回の値が、他の質問項目と比較すると、やや平坦な波形を示していた。このことから、集団において他者と連携し、協力して課題に取り組むことにおいて、全ての発表形式で常に高い意識を継続し続けながら、活動を行うことができたことが明らかとなった。12月13日、12月20日における全体の活動では、ホール劇が特に高い値を示していた。1月10日に行われた中間発表に向け、幼児教育祭でのねらいを踏まえた劇の作成、準備、発表に向け、その他の発表形式よりも、他者と連携し協力することへの意識がより高まっていたことが推測される。また、教室劇では、1月24日での活動において、その他の活動場所よりも低い値であったが、当日の練習における段取りの悪さが、他者と連携し協力することにおいても意識を低下させる要因であったこと明らかとなった。また、ホワイエ劇と教室劇において、12月20日の値と比べ1月10日の値が大幅に上昇していることから、台本の検討から、舞台構成の検討、およびセリフ読み合わせへの活動へ移行することによって、他者と協力する意識が非常に高まったことが、推測される。

図表4　④「集団において他者と連携し、協力して課題に取り組む」での各発表形式における推移

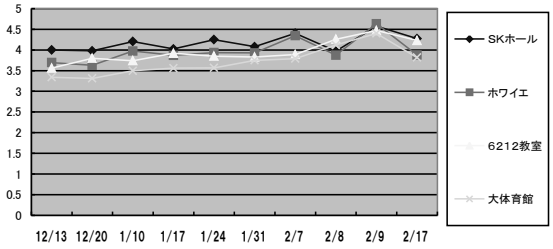


	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	4.2	4.2	4.2	4.2	4.3	4.2	4.6	4.2	4.8	3.9
ホワイエ劇	3.9	3.8	4.2	4.2	4.2	4.1	4.6	4.2	4.7	3.9
教室劇	3.8	3.8	4.3	4.2	3.9	4.1	4.2	4.4	4.7	4.2
巨大迷路・アトラクション	3.9	3.9	4.0	4.1	4.0	4.0	4.1	4.3	4.5	3.9

3.＜幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項＞

図表5においては、図表4と同じようにやや平坦な波形を示していた。他者の声を真摯に受け止め、公正な姿勢、受容的な態度で接することに関しては、どの発表形式でも、授業進度に沿って継続的に学生の意識が維持されていたものと推測される。全体的には、ホール劇における値がその他よりやや高い値であった。ホール劇での活動を望むクラスが多いため、毎年コンペにより発表形式が決定しいる。コンペで選ばれたホール劇での活動に対して、学生自身が責任を強く感じている影響の現れから、発表形式が決定した直後の授業から、高い意識をもって活動が行われていたことが明らかとなった。また、巨大迷路・アトラクションにおいて、12月13日から2月7日までの値が、その他の発表形式と比較してやや低い値であった。劇を通じた活動と比べてみると、巨大迷路・アトラクションでは、製作に打ち込む時間の割合が多いことから、対人的なコミュニケーションの時間の割合が、その他の発表形式と比べてやや少ないことが予想され、低い値はその影響と推測される。

図表5　⑤「他者の声を真摯に受け止め、公正な姿勢、受容的な態度で接する」での各発表形式における推移

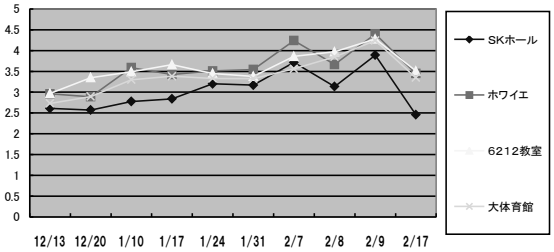


	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	4.0	4.0	4.2	4.0	4.3	4.1	4.4	4.0	4.6	4.3
ホワイエ劇	3.7	3.6	4.0	3.9	3.9	3.9	4.3	3.9	4.6	3.9
教室劇	3.6	3.8	3.7	3.9	3.9	3.8	3.9	4.3	4.5	4.2
巨大迷路・アトラクション	3.3	3.3	3.5	3.6	3.6	3.8	3.8	4.1	4.4	3.8

図表6においては、各発表形式において、それぞれが特徴的な波形を示しており、ホール劇での値が全体を通してその他の発表形式よりも低い値であった。ホワイエ劇では、舞台構成についての検討が行われた12月20日から1月10日にかけての値が大きく上昇したことが認められ、2月7日のリハーサルでは、その他の発表形式よりも高い値を示していた。子どもに実際に触れる事ができるほどの近距離で発表ができるホワイエ劇における会場の特性から、環境を構成する学生の意識がより高まったと推察される。また、1月17日から1月24日にかけてのホール劇での値の推移について、当初の案であった台本の内容や役の配当を再検討し直し、発表に向けた具体的な練習ができる段階まで準備が進んだことの現れから、値が大幅に上昇したものと考えられる。

一方で、ホール劇では環境を構成することについて、ホールの構造上舞台と客席が完全に分けられており、活動場所から子どもまで距離があるため、子どもと直接関わるといった活動がその他の発表形式よりもやや制限されてしまう。ホール劇では、劇を行うための照明や音響等の環境が最初から整っているため、照明の設置の位置や音響などを一から考える必要のあるホワイエ劇と比べると、環境を構成するといった点で、学生の達成意識に少なからず差が生じたと推測することができた。

図表6　⑥「ねらいに応じた教材（台本・制作物等）を開発、作成し、環境を構成する」での各発表形式における推移

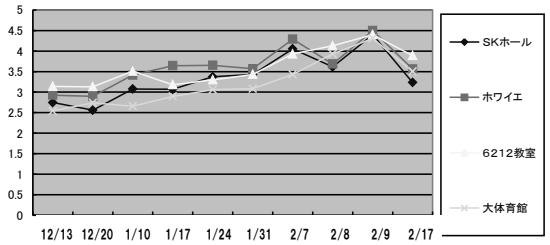


	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	2.6	2.6	2.8	2.8	3.2	3.2	3.7	3.1	3.9	2.5
ホワイエ劇	3.0	2.9	3.6	3.4	3.5	3.5	4.2	3.7	4.4	3.5
教室劇	3.0	3.4	3.5	3.7	3.5	3.4	3.9	4.0	4.3	3.5
巨大迷路・アトラクション	2.7	2.9	3.3	3.4	3.3	3.3	3.6	3.9	4.2	3.4

4. ＜教科・保育内容等の指導力に関する事項＞

図表7においては、全体的に、ホワイエ劇が高い値を示し、巨大迷路・アトラクションでの値がその他の発表形式よりもやや低下していた。発問や話し方等、保育を行ううえでの基本的な表現の技術を身に付けようとする事柄については、巨大迷路・アトラクションでの2月8日と2月9日に到る前の幼児教育祭に向けた製作活動では、実際に人と関わる時間よりも、製作における製作物と向き合う時間が多いことが予想されるため、学生自身がそれを意識する機会がやや少ないことが推察される。一方で、1月31日から2月9日の幼児教育祭2日目に至るまでの値の上昇幅が一番大きく、その期間における活動が学生の意識を高めたことが明らかであった。また、劇における活動では、子どもと関わることのできる機会が、発表する時間内にある程度限られていることに対し、巨大迷路・アトラクションでは、継続的に子どもと関わることが可能である。つまり、巨大迷路・アトラクションで活動を行った学生にとって、幼児教育祭当日の子どもとのコミュニケーションが、学生が発問や話し方等、保育を行ううえでの基本的な表現の技術を身に付けようとする意識を高めるうえで極めて重要であることが、この値の変化から読み取ることができた。その他の発表形式においても同様に、幼児教育祭当日に高い意識を学生が持っていたことが明らかとなった。

図表7　⑦「発問や話し方等、保育を行ううえでの基本的な表現の技術を身に付けようとする」での各発表形式における推移

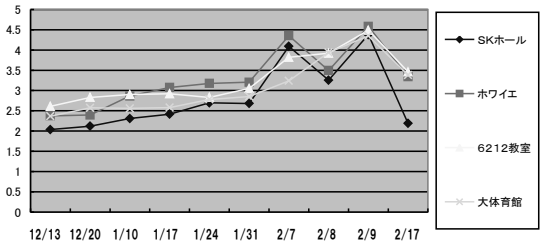


	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	2.7	2.6	3.1	3.1	3.4	3.4	4.1	3.6	4.4	3.2
ホワイエ劇	2.9	2.9	3.4	3.6	3.7	3.6	4.3	3.7	4.5	3.6
教室劇	3.1	3.1	3.5	3.2	3.3	3.4	3.9	4.1	4.4	3.9
巨大迷路・アトラクション	2.5	2.7	2.7	2.9	3.1	3.1	3.4	3.9	4.3	3.5

図表8においては、全発表形式における12月13日から1月31日までの値について、同じ期間のその他の設問と比較すると、極めて低い値であったことが明らかとなった。発表形式別で見てみると、その期間におけるホール劇での値が低い状況であった。この結果から、発表形式決定後から総括までのうちの10回の授業における、前半（12月13日）から中間部分（1月31日）にかけて、学生が活動を行ううえで、

子どもの反応を想定することが困難であることが予想された。従って、幼児教育祭における、実際に子どもと関わる機会が極めて重要であることが明らかである。このことにより、アンケートにおける学生の回答には体験したことが明確に反映されていることが伺える。教科・保育内容等の学生の指導力を高めていくうえで、子どもの反応を活かすためにどのような保育を展開するべきかについて、練習や制作の過程において、学生の学びをより充実させるために、学生が継続的に意識できるような活動内容について授業担当教員が検討を重ねる必要がある。

図表8　⑧「子どもの反応を活かし、皆を巻き込みながら保育を展開する」での各発表形式における推移



	12月13日	12月20日	1月10日	1月17日	1月24日	1月31日	2月7日	2月8日	2月9日	2月17日
ホール劇	2.0	2.1	2.3	2.4	2.7	2.7	4.1	3.3	4.4	2.2
ホワイエ劇	2.4	2.4	2.9	3.1	3.2	3.2	4.4	3.5	4.6	3.3
教室劇	2.6	2.8	2.9	2.9	2.8	3.1	3.8	3.9	4.5	3.5
巨大迷路・アトラクション	2.4	2.6	2.6	2.6	2.8	2.9	3.2	3.9	4.4	3.4

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では、文部科学省が本授業に含める事項として定められた「教員として求められる4つの事項」について発表形式別に着目し、学生の意識の変容について調査分析を行った。その結果、学びのプロセスに沿った学生の意識の変容に差が見受けられたものの、全ての発表形式で、幼児教育祭を経て4つの事項の値が上昇し、学生の意識が強く高まったことが明らかとなった。このことから、「保育者に必要な資質能力を再確認し、これまでの学修全体をまとめていく演習を通じて、保育現場における実践を伴うことができる力量の形成を目指す」ことを目的とした本授業運営及び学生の活動が、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」としての成果を導き出す大きな役割を果たしていることがわかった。そして、授業進度の時系列に沿い、異なる発表形式において整理すると、劇発表においては、学生の対人関係への意識や伝えようとする気持ちの高まりが見られるようになり、巨大迷路・アトラクションの発表では、そこでの活動が他者と連携・協力して課題に取り組もうとする学生の自覚的な意識として高まっていたことが明らかになった。また、発表形式別のそれぞれの場所や空間の構造の違いが学生のさまざまな意識の差を生むことも見えてきた。さらに、8つの設問項目の回答結果分析とその考察を経て、幼児教育祭に向けた準備活動の段階から、保育実践における基本的な表現の技術を身に付けようとする学生の意識が高まるということは、極めて困難であるということを理解するに至った。

今後は、これらの結果分析をさらに深め、保育現場における生活発表会を想定して行う、学生が主体となった発表活動が、卒業後の学生の教職生活に直接活かされる学びへと繋がるよう、授業運営について継続的に検討を重ねていく必要性を感じている。また、次年度は4項目の中の「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」に焦点をあて、子どもの特性や心身の状況を把握した上での学級経営の重要性について、学生がどのように意識をし、本授業において学びを得ているかについて分析を行っていきたい。

引用・参考文献

- 中村治人・大岩みちの，岡崎女子短期大学における教職実践演習（幼稚園）初年度実践報告―教職実践演習の実施に係る課題―東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会　東海教師教育研究第27号，pp.37-46，2013年
- 山田悠莉・妹尾美智子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭・岸本美紀・水谷誠孝，保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭3―効果的なチーム・ティーチングを行うために―岡崎女子短期大学研究紀要第44号，pp.35-41，2011年
- 鈴木方子・大岩みちの，保育者を目指す学生の育ちを願って―実習における課題とねらいの指導―岡崎女子短期大学　研究紀要第46号，pp.1-7，2013年
- 米窪洋介・山田悠莉・鳥居恵治・小野隆・大岩みちの・佐善圭，「教職実践演習（幼稚園）」実践報告・共通理解の必要性―相互理解における活動の変化について―岡崎女子短期大学　研究紀要第47号，pp.33-40，2014年
- 岸本美紀・長柄孝彦・妹尾美智子・本山益子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭，保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭―「幼児教育祭」を保育現場につなげるために―岡崎女子短期大学　研究紀要第42号，pp.11-16，2009年

・ 岸本美紀・妹尾美智子・鳥居恵治・大岩みちの・佐善圭・山田悠莉・水谷誠孝・本山益子，保育内容を実践に活かす取組としての幼児教育祭 その2―「幼児教育祭」を保育現場につなげるために―岡崎女子短期大学 研究紀要第43号，pp.23-30，2010年
・ 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 2008年
・ 文部科学省 「教職実践演習（仮称）について」中央教育審議会 2006年 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm

平成25年度 「教職実践演習」授業アンケート 授業実施日＿＿月＿＿日

クラス＿＿＿＿学籍番号＿＿＿＿＿＿氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

Ⅰ 今日の授業において、以下の項目についてどの程度意識・体験しましたか？当てはまる番号を○で囲んで下さい。また①～④については、どのような場面であったかを具体的に〔〕へ記入してください。

	非常に	かなり	まあまあ	あまり	全く
①人と関わることの楽しさや大切さを味わう 〔 〕	5	4	3	2	1
②伝え合い共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする 〔 〕	5	4	3	2	1
③自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を充分に発揮する 〔 〕	5	4	3	2	1
④集団において他者と連携し、協力して課題に取り組む 〔 〕	5	4	3	2	1
⑤関わった人たちとの温かい触れ合いの中で、自己の存在感や充実感を味わう	5	4	3	2	1
⑥興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組む	5	4	3	2	1
⑦体を動かすことの楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする	5	4	3	2	1
⑧自らが周囲に働きかけることにより、多様な感情を体験する	5	4	3	2	1
⑨試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わう	5	4	3	2	1
⑩物を大切にする気持ち、公共心を養なう	5	4	3	2	1
⑪自分の感情や考えを伝え合う喜びを充分に味わう	5	4	3	2	1
⑫絵本や物語等に数多く出会い、豊かなイメージを抱く	5	4	3	2	1
⑬文字に対する興味や関心、感覚を持つ	5	4	3	2	1
⑭様々なことに出会い、そこから得た感動を他者と共有し様々に表現する	5	4	3	2	1
⑮特定の技能を身に付けようとする	5	4	3	2	1
⑯挨拶・言葉遣い・人への接し方・服装等、社会人（保育者）としての基本的な事項を身に付けようとする	5	4	3	2	1
⑰他者の声を真摯に受け止め、公平な姿勢、受容的な態度で接する	5	4	3	2	1
⑱子どもの発達と保育内容を考慮した活動を構成し、子どもの反応を想定したポートフォリオとしてまとめる	5	4	3	2	1
⑲「ねらい」に応じた教材（台本・製作物等）を開発、作成し、環境を構成する	5	4	3	2	1
⑳子どもの反応を生かし、皆を巻き込みながら保育を展開する	5	4	3	2	1
㉑発問や話し方等、保育を行ううえでの基本的な表現の技術を身に付けようとする	5	4	3	2	1

※下線は本研究で着目した8つの質問項目である。質問項目番号については本文のものとは無関係である。